

客観主義意味論と認知意味論のパラダイム

嶋 村 誠

1. はじめに

現在の言語学界には二つの大きな潮流を認めることができる。一つは、1950年代に彗星のごとく世に現れたチョムスキーに始まり、常にチョムスキーを中心としながらも、その後絶えず変革しそして数年おきに大変革をとげながら現在に至るまで長年にわたって言語学界をリードしてきた生成理論 (generative theory) である。もう一つは、生成理論に対立するかたちをとりながら、互いに独立して展開してきたいくつかの言語理論が、ゆるやかながらも結合したものとしてとらえられ、そのグループの総体がひとまとめに認知言語学 (cognitive linguistics) と呼ばれているものである。¹⁾ 全体で認知言語学と呼ばれている諸理論のあいだで、用語や言語分析の理論・方法が統一されているわけではない。それにもかかわらずひとまとめにして考えられるのは、独自性を保ちながらも、このグループに属する研究者が言語に対する共通の問題意識をもっていと考えられるからである。

言語研究のアプローチについて論じる場合、どのようなことに目を向けるべきであろうか。各アプローチがどのような理論や方法論をもっているかということに目を向けただけでは、構築物としての理論や方法論を問題にすることは

1) 認知意味論の概念について詳しくは、Lakoff (1987)、Langacker (1987, 1991a, 1991b)、Taylor (1989/1995)、Ungerer and Schmid (1996)、河上 (1996)、坂原 (1998)、山梨正明 (1995) などを参照。

できても、言語の本質をとらえているかどうかという根本的な問題を素通りしてしまう危険性がある。言語理論や方法論は決して人工的な架空の構築物を生み出すためのものではないはずである。言語の本質をとらえようとする言語研究者が、どのような言語観をもっているのか、言語と言語を使っている言語主体としての人間との関係をどのようにとらえているのか、言語と外界の世界をどのようにとらえているのか、外界の世界と言語主体としての人間との関係をどのようにとらえているのか、外界の世界と言語主体としての人間との関係をどのようにとらえているのかというような、言語理論や方法論が生まれる以前の研究者のスタンスを明らかにしてこそ、それぞれの言語理論や方法論の存在理由や問題点が浮き彫りになるものと思われる。こうした研究者のスタンスの妥当性が問われないうまま、もっぱら理論や方法論の構築だけに努力を払うことは、言語の本質をとらえる研究が行われることが保証されないことを意味する。そのような状態で研究を進めていたのでは、もしも暗黙のうちに前提となっている言語観、人間観、世界観に問題があることが後になって判明した場合には、それらが言語活動の根本にかかわる問題であるだけに、理論や方法論全体がその土台を失って一度に崩壊してしまう可能性を含んでいる。実際に言語を具体的に研究する段階では、上で述べたような研究者の言語観、人間観、世界観は背景となって議論の現場からなりを潜めてしまうことが多いため、ともすれば言語に対する基本的な問題意識が問われないうまま議論が進められてしまいがちである。

そこで、本稿の目的は、生成理論を含めて従来の言語理論と認知言語学（特に認知意味論と呼ばれているもの）を支配しているパラダイムのいくつかを検討し、それらの理論・方法論によって言語研究が行われるときに背景となっている意味観や言語観を明らかにすることによって、言語の本質にせまる研究はどうあるべきかということ問い、また、その過程で言語理論が意味論を基盤にすることの意義を明らかにすることである。

2. カテゴリー化

従来の言語学と認知言語学のパラダイムについて検討するに先だって、認知

言語学における重要な認識上のプロセスについて触れておこう。

我々が普通に日常生活のなかで思考、知覚、行動、言語活動などを営んでいるとき、実にさまざまなことを行っている。たとえば、今書斎にいる。部屋にはドアが二つある。何か音が聞こえた。それが電話のベルの音であると理解し次の行動に移る。どこが廊下に通じるドアかということを理解し、そこを歩いて廊下に出る、どちらに曲がれば電話機のある部屋かということを理解し、右に曲がる。いくつか並んでいる受話器の中からどれが電話機の受話器であってインターフォンの受話器でないかということを理解し、その中の一つを手にする。

こうした日常生活の営みの中で、我々は特に意識していない場合も多いが、自分が直面したそういうものをそういうものだと理解しながら、またその理解に基づいて次のまた別の理解へと移りながら、日常の営みを続けている。しかし、もしもこのような理解が正しく行われなかったとしたらどうであろうか。例えば、テレビのコントローラを見て電話の受話器であると理解したり、窓を見て廊下に通じるドアであるというような理解をしたのでは、もはや通常の日常生活を送ることができない。つまり、こうした日常のなにげない営みのなかでも、我々は何が何であるか、どちらがどれか、だからああだろう、だからこうだというような分類や推論を、意識的であれ無意識的であれ、絶えず継続的に行っているということである。しかもこうした分類や推論は、我々が日常生活を営んでいくうえで必要欠くべからざる基本的なものである。そして、認知意味論においては、このような、我々が知覚・経験することによってとらえる情報の帰属先を決定する心的過程のことを、現在ふつうカテゴリー化 (categorization) と呼んでいる。²⁾

さきほどみた電話のベルの音を聞いたときの一連の流れにおける最初の段階で、何か自分の知覚神経を刺激するものがあって、それを感じたときに、それ

2) カテゴリー化については、Taylor (1989/95)、Lakoff (1987)、Tsohatzidis (ed.) (1990)、Corrigan et al. (eds.) (1989)、Craig (eds.) (1986)、Croft (1991)、Rosch and Lloyd (eds.) (1978)などを参照。

がいろいろな神経のなかでも聴覚神経が刺激されているのであると判断するような、神経レベルでのカテゴリー化については本稿では取り上げないが、音が聞こえたと判断してからそれが何の音であるかを理解したり、どれが廊下に通じるドアかということを理解したり、いくつかの受話器の中から電話の受話器を選んだりするとき、すべてカテゴリー化を行っているわけである。認知意味論において、このカテゴリー化についての研究はとても重要なものである。なぜならば、われわれがあるものに対してカテゴリー化するということは、われわれの概念体系のなかでそれを位置づけるということであるから、われわれの概念体系を解明するうえで重要な意味をもっているからである。

3. 従来の言語理論のアプローチ

3.1 意味論の位置づけ

言語は形式と意味から成っているというとらえかたは、言語学において従来も現在も自明のこととしてよい。しかし、形式あるいは意味とはどのようなものなのかということに関しては、言語理論によってさまざまに考えられてきたわけで、これまでの言語学の歴史は、形式観と意味観の歴史であったと言ってもさしつかえないであろう。

これまでの言語研究の歴史を振り返ってみると、理論の中での意味の位置づけと扱い方は一様ではない。まず、ヨーロッパの伝統文法においては、統語論が意味と不可分の関係にあるという考え方があったものと思われ、統語論が意味論を内包するかたちの扱いがなされていた。³⁾

また、アメリカにおいては、チョムスキー以前の言語学といえば、構造主義言語学が隆盛を極めていた頃であり、言語学といえば構造主義言語学にほかならない時代であった。構造主義言語学、特にアメリカ構造主義言語学においては、言語学の研究対象から意味的側面を排除し、外部から観察できるもの、すなわち言語の形式面の構造を科学的手法によって発見することを、事実上、目

3) たとえば、Sweet (1892-98) や Jespersen (1909-49)。

標としていたと考えられる。⁴⁾しかし、アメリカ構造主義言語学において研究領域から意味の面が排されていた理由は、決して意味を無視していたからではなく、意味は複雑すぎて到底科学的手法によって扱いきれないからということである。事実、ブルームフィールドは意味に頼らないことを力説しながらも、アメリカ構造主義言語学のバイブルともいわれる Bloomfield (1933: 137-38) において、意味の重大性に触れた箇所、音声学や音韻論が意味についての知識を前提としていると述べ、また意味論が文法と語彙に分かれるとしていることは興味深い。アメリカ構造主義言語学が意味論を正面から取り扱うことはなかったが、音韻論など言語の形式面を扱いきったあかつきには、意味も言語学で取り扱わなければならない大きな問題であるとの認識はもっていたということになる。しかしそれが現実のものとならないうちに次の世代の言語学にとって代わられたわけである。

構造主義の後をうけたチョムスキーの言語学では、初期の理論においては、構造主義の場合と同様に言語の研究領域から意味論が排除されていた。すなわち、生成理論が直接の研究対象とするのはセンテンス・グラマーとしての統語論を中心として、音韻論までが研究の射程内であるが、意味の問題を持ち込まないで研究することこそが、言語学の研究方法としてあるべき姿であると考えられていた。また、意味論が言語理論の一部門として位置づけられて、実質的に意味論研究が行われるようになってから後も、言語研究はあくまでも統語論と音韻論を中心に行われたために、生成理論における意味論の研究は統語論よりも大きく出遅れることとなった。

3.2 客観主義

- 4) 特定言語の発話資料が与えられると、それだけを基にしてその言語の文法を自動的かつ機械的に発見することができる手順のことを、「発見の手順 (discovery procedure)」と呼ぶ。アメリカ構造主義言語学自らが発見の手順を第一目標に掲げていたわけではない。しかし Chomsky (1957: 51-2) によれば、構造主義言語学は実質的には発見の手順を明らかにすることを目標としているが、一般言語理論の目標としてはこれは高すぎるものであり、生成理論はこれよりもレベルの低い評価の手順を達成することを目標としている。

つぎに意味観に焦点をしばって考察することにするが、従来のさまざまな言語理論を比較してみると、意味をどのようなものとしてとらえているのかという観点からながめた場合、客観主義 (objectivism) と呼ぶことのできる共通の意味観が前提にされていることがうかがえる。これは、「意味は外界の客観的な状況のなかに内在するものであって、人間が自らとの関連で認知したり理解したりする営みとは独立して存在している」という意味観であり、従来の言語理論において (多くの場合暗黙のうちに) 前提とされている考えである。客観主義に基づく言語分析の具体例は、次節で品詞の扱いについて論じるときに取り上げることにする。

3.3 古典的カテゴリー化

次に、従来の言語学に古典的カテゴリー化という特徴があることをみておこう。⁵⁾ 本稿で「古典的」カテゴリー化というとき、Taylor (1989/1995: 22) に倣って、二つの意味で「古典的」という用語を用いている。すなわち、この種のカテゴリー化が古代ギリシャにまでさかのぼるという意味で古典的であると同時に、今世紀の大半にわたって、心理学、哲学、言語学 (特にアメリカ構造主義言語学と生成理論の両方を含めた自律的言語学) において支配的な位置を占めてきたという点でも古典的であるという気持ちを込めて用いている。

まず、古代ギリシャのアリストテレスにおけるカテゴリーのとらえ方を概観しておこう。アリストテレスは、ものの本質 (essence) と偶有的属性 (accidents) とを区別した。⁶⁾ 本質とは、あるものをそのものたらしめているものであり、偶有的属性というのは、たまたま付随的に備わっている属性であって、あるものがそのものたるために必然的に備えていなくてもよいものことである。アリストテレスが例として挙げているものをみると、「人間」の本質は「二本足の動物」ということになる。人間は「教養がある」というようなことは、偶有的属性であり、ある個人については当てはまるかもしれないが、ある存在

5) 古典的カテゴリーについて、詳しくは Taylor (1989/1995: ch. 2) を参照。

6) Aristotle (1933: vol. 5) を参照。

物が人間であることを決定するために必要欠くべからざるものではない。したがって、教養があるということは人間の本質に関するものではないということになる。

ところで、古代ギリシャの時代から定義とは何かということがしばしば問題にされてきたが、およそ定義というものが満たしていなければならない最低条件として次のようなものが考えられていると思われる。

- (1) 定義は、定義されるものの本質を明らかにするものでなければならない。

ものの本質を明らかにするということは、見方を変えれば、そこで明らかにされている本質を備えているものであれば、すべてその定義されているものであるということになる。さきほどの「人間」の例に立ち返って考えると、アリストテレスがとらえた人間の本質は「二本足の」と「動物」という二つの素性であった。これら二つの素性は、どちらの一つが欠けても人間でないものをも指してしまうので、人間というカテゴリーを定義するうえでどちらも必要欠くべからざる素性である。この二つの素性が連帯してはじめて人間を定義する定義として成り立つことになる。つまり、あるものがこれら二つの素性を同時に満足することによって人間というカテゴリーの成員になる。したがって、古典的カテゴリーは(2)のようなことを前提としていることになる。

- (2) 古典的カテゴリーとは、そのカテゴリーの成員であるための必要十分な素性の連言によって定義されるカテゴリーである。

(2)を言い換えると、定義が定義として機能するためには、あるカテゴリーの成員ならばこれこれしかじかの素性を備えており、またそのような素性を備えているならばそのカテゴリーに属しているということが成り立たなければならないということである。つまり、ある古典的カテゴリーの定義は、そのカテゴ

リーの成員であるための必要にしてかつ十分な条件を述べたものということになる。

また、アリストテレスをはじめとする古典的カテゴリーの考え方によれば、次のようなことも前提とされている。

- (3) 古典的カテゴリーにおいて、あるものがそのカテゴリーの成員であるための素性は二項対立的である。

すなわち、そうした素性はカテゴリーの定義に含まれているかいないかのどちらかでありその中間はない、また、あるものはそうした素性をもっているかいないかのどちらかでありその中間はない。そして(3)の帰結として考えられるのは、(4)と(5)も前提とされているということである。

- (4) 古典的カテゴリーは明確な境界をもっている。

- (5) 古典的カテゴリーのすべての成員はそのカテゴリーの成員としてすべて同じ地位をもっている。

したがって、ある古典的カテゴリーの定義が与えられると、すべてのものはそのカテゴリーに属するか否かのいずれかにはっきりと分けられ、また、そのカテゴリーの成員はどの成員もそのカテゴリーの完全な成員であって、そのカテゴリーへの帰属度に差はない。すなわち、あるカテゴリーのなかで、この成員はあの成員よりも成員としてよりふさわしいというようなことはないと考えられている。

以上、古代ギリシャにさかのぼることのできる古典的カテゴリー化の特徴をながめてきたが、つぎに言語学におけるカテゴリーという概念について考えてみよう。言語学におけるカテゴリーといってもさまざまなものがあり、それぞれの言語理論が設定しているカテゴリーは、ほかの言語理論におけるものとは異なっていることも多い。しかしいずれにせよ、それぞれの言語理論が行って

いるカテゴリー化は、言語記述という目的を達成するために基本単位を分類してそれに名前をつけているわけであるから、カテゴリー化のしかたがその言語理論の成否に直接関わってくるほどの重要な意味をもってくることもある。

そこで、言語学におけるカテゴリー化の例として、まず伝統文法における品詞分類をとりあげ、それについてアメリカ構造主義言語学や生成理論などがどのように考えていたかということ振り返ることにより、従来の言語理論におけるカテゴリー化の特徴をさぐってみよう。さて、伝統文法における品詞の定義として最も一般的に行われているのは、品詞を名詞、代名詞、動詞、形容詞、副詞、接続詞、前置詞、間投詞の八つに分類するいわゆる「八品詞」であり、それぞれは例えば次のように定義された。

- (6) a. 名詞とはものの名前を表す。
- b. 動詞とは動作・行為を表す。
- c. 形容詞とはものの属性を表す。

そして、これら伝統文法による品詞の定義について、その後のアメリカ構造主義言語学や生成理論からの批判はおよそ次のようなものであったと言えるであろう。

- (7) 伝統文法における品詞の定義は主観的であり、したがって客観性に欠けた非科学的なものである。また、定義されているものの本質を明らかにするという定義の最低条件を満たしていないため、定義が定義としての資格を備えていない。

確かに、(6)のようなカテゴリー化によれば、例えば名詞の場合、‘book’、‘pen’、‘house’などについては「もの」の名前と考えられるのでこの定義に当てはまるが、‘kindness’、‘love’、‘height’など抽象概念については果たしてものの名前といえるであろうか。これらの定義はそれが定義しようとしているものの

本質をとらえているであろうか。例えば、'arrive' について、それが果たして動作を表すと言えるかどうかという問題のほかに、たとえ動作を表すとして、それゆえ動詞であるというならば、'arrival' も動作を表すという点では同じであるからこれも動詞であるというということになりはしないか。そうだとすると、定義が備えていなければならない条件(1)も(2)も備えていないということになるのではないか。また、例えば 'however' など学者によって見解を異にする語も少なくないということは、定義が主観的であり、客観性に欠けるものということになる、等々、伝統文法における品詞の定義についての批判は尽きない。

そこで、初期の生成理論において、品詞の定義は、(8)のような書き換え規則 (rewriting rules) と呼ばれるものによって行われることになった。

- (8) a. $N \rightarrow$ man, ball, elephant, tiger, arrival, etc.
 b. $V \rightarrow$ eat, scare, gallop, swim, arrive, etc.
 c. $A \rightarrow$ big, hot, silent, young, possible, etc.

(8)のように定義することによって、例えば (8a) で矢印の右側に定義されているならば、それが名詞である (Nである) ことの必要にしてかつ十分な条件を満たしているということであるとされた。動詞 (V) や形容詞 (A) についてもまったく同様の方法で定義されることになった。そして、このような書き換え規則によって品詞を定義するという方法は、伝統文法における品詞の定義方法の欠陥を克服する客観的な科学的方法であるとして歓迎されたわけである。しかしここで注意しなければならないのは、生成理論によって導入された(8)のような新しい品詞の定義も、目先のかたちは伝統文法の品詞の定義方法とは異なるものであるけれども、やはりさきに見た古典的カテゴリーであるという点では同じであるということである。なぜ古典的カテゴリーと考えられるかということ、第一に、例えば「Nとは何か」「Vとは何か」「Aとは何か」と問われるならば、それぞれ書き換え規則(8)の矢印の右側に並んでいる要素であるということになり、その要素であるかどうかということがそれぞれの品詞であること

の必要にしてかつ十分な条件となっているからである。また、第二に、矢印の右にある要素はどの要素も同じ資格でその品詞であるということが想定されているからでもある。つまり、品詞の定義方法から考えると、伝統文法もアメリカ構造主義言語学も生成理論も、すべて客観主義に基づくものであるということになる。

4. 認知意味論のアプローチ

4.1 認知とは

従来の意味論、すなわち客観主義に基づく意味論は、意味とは言語と外界の状況とのあいだの直接的な対応関係にほかならないとの想定に基づいて、その対応関係を明らかにしようとするものである。言語が言語としての機能を果たすためには、外界の状況と何らかの意味で対応していなければならないはずである。そこで言語の働きを明らかにするということは、言語と外界との対応関係を明らかにすればよいということになるわけである。したがって、そのような意味論が扱うものは言語と外界との直接的な対応関係であるから、言語と外界の状況とのあいだに、人間との関係や、人間の果たす役割などは介入してこない。もちろん、言語は人間が使用しているものであり、従来の言語学においても、特に生成理論は人間の言語能力を明らかにしようとするものであるから、例えば言語直観などのような人間の認識を念頭におきながら研究することはいうまでもない。しかし、そうした研究の結果でてくる意味論は、あくまでも言語と外界の状況との対応関係であり、そこに人間が介在したかたちのものではない。

一方、これとは全く異なる意味観をもつ意味論がある。それは、言語の意味とは、人間が外界の状況と身体とに密接に関連しながら、人間が人間であるがゆえに可能となっている脳の精神作用の結果として生まれる概念体系であり、意味論はそうした概念体系を明らかにしようとするものである、というものである。人間が外界の状況をどのように理解しているか、すなわち認知しているか、ということを実らかにしようとするものであるということが出来る。した

がって、このような立場の意味論は、言語を単に外界の状況と対応しているものと位置づけるのではなく、また、人間の精神作用の特殊な一部分として位置づけるものでもなく、言語は脳が外界の状況についての情報を処理するときの脳の総体的な精神作用に深く関係しているものであると位置づけるものである。認知 (cognition) とは、そのような情報に関する脳の総体的な精神作用そのものであると考えることができる。そして、そのような精神作用をもとにした意味論が、認知意味論 (cognitive semantics) と呼ばれるものであるということが出来る。

4.2 意味論と認知との関係

すでに前節で触れたところからも明らかであるが、認知意味論の立場では、意味とは概念体系そのものにほかならないと想定されている。概念体系というものが認知という情報に関する脳の総体的な精神作用によって構築されるものであるならば、意味は認知という過程によって構築されることになる。そこで、果たして意味が認知過程によって生まれるものであると想定する根拠があるのかどうかということを考察しておくことにする。

認知言語学では、メタファーに関して次のような議論がなされる。まず、次の例文について考察してみよう。⁷⁾

- (9) a. Bill forced the ball into the hole.
- b. Bill forced Harriet into talking.
- (10) a. Bill kept the ball in the hole.
- b. Bill kept Harriet talking.
- (11) a. He buttressed the wall.
- b. He buttressed his argument with more facts.

7) (9-10) は Jackendoff (1985 : 25-26) から、(11) は Lakoff and Johnson (1980 : 106) から借用。

それぞれのペアの (a) 文は具体的な対象物として知覚することのできる領域の行為を表現したものであり、(b) 文は抽象的な領域に属する行為を表現したものである。いずれのペアにおいても (a) 文と (b) 文が表している対象としての外界の状況は全く異なるものであり、これら二つの状況の間には、人間の認知のしかた以外に、なんらの客観的な共通性もないと考えてさしつかえあるまい。それにもかかわらず、それぞれのペアにおいて (a) 文と (b) 文がなんらかの共通の意味をもっているということは、言語直観からしても明らかであろう。そうだとすると、言語の意味は外界の状況に客観的に内在しているわけではなく、表現主体である人間が脳の精神作用としての認知過程として成立するものであるとしか考えられないことになる。このことは、認知意味論が認知を基盤にして意味論を構築しようとする根拠になると考えられる。

5. まとめ

従来の客観主義の言語学においては、言語と人間とのかかわりをできるだけ捨象したかたちで研究されてきた。そうすることが「科学的」と考えられたからである。しかし、言語を使っている我々は人間であり、一般にものごとを理解することは、われわれが人間としての身体、特に脳の精神作用を通して初めて可能になるのである。この極めて人間的な機能があってこそ、我々が行う概念化、カテゴリー化、理解、認知などが成立しているわけである。すなわち言語が成立するところにもし人間が介在していなければ、言語そのものが成立しないはずである。確かに、人間が介在しなくても成立する客観的な状況というものは存在する。しかし、その客観的な状況をわれわれが理解することができるのは、この人間的な機能によってしか理解できないということに注目すべきである。つまり、人間の脳による精神作用を通してしか我々はものごとを概念化したり、カテゴリー化したり、理解したりできないのである。意味論を基盤にして言語理論を構築する意義もそこにある。したがって、客観主義言語学のように客観的な状況そのものに意味があるとして人間不在のかたちでとらえようとすることは、言語を科学的にとらえることではなく、単に客観的

状況そのものを説明しようとすることにしかならない。

認知意味論のパラダイムのなかで本稿で取り上げたのはそのほんの一部にすぎないが、それでも、言語を研究する姿勢として、言語を使っているわれわれ人間の介在を前面に押し出したかたちで研究しなければならないということは明らかにすることができたものと思う。人間全体にかかわるようなスケールの大きな射程範囲をもち、かつ柔軟なスタンスで意味論を構築しようとする認知意味論が大きな説明力を備えていることの魅力は尽きない。

(筆者は関西学院大学商学部助教授)

参考文献

- Aristotle. 1933. *Metaphysics*. Trans. Hugh Tredennick. London: Heinemann. (出隆 (訳). 1959-1961. 『形而上学 上・下』岩波文庫.)
- Bloomfield, Leonard. 1933. *Language*. London: George Allen & Unwin.
- Chomsky, Noam. 1957. *Syntactic structures*. The Hague: Mouton.
- Corrigan, Roberta L., Fred Eckman, and Michael Noonan, eds. 1989. *Linguistic categorization*. Proceedings of an International Symposium in Milwaukee, Wisconsin, April 10-11, 1987. Amsterdam: John Benjamins.
- Craig, Colette, ed. 1986. *Noun classes and categorization*. Proceedings of a Symposium on Categorization and Noun Classification, Eugene, Oregon, October 1983. Amsterdam: John Benjamins.
- Croft, William. 1991. *Syntactic categories and grammatical relations*. Chicago: University of Chicago Press.
- Jackendoff, Ray. 1985. Information is in the mind of the beholder. *Linguistics and Philosophy* 8, 23-33.
- Jespersen, Otto. 1909-49. *A modern English grammar on historical principles*. 7 vols. London: George Allen & Unwin.
- 河上誓作 (編著). 1996. 『認知言語学の基礎』東京: 研究社出版.
- Lakoff, George. 1987. *Women, fire, and dangerous things: What categories reveal about the mind*. Chicago: University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作他 (訳). 1992. 『認知意味論: 言語から見た人間の心』東京: 紀伊國屋書店.)
- Lakoff, George, and Mark Johnson. 1980. *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press. (渡部昇一他 (訳). 1986. 『レトリックと人生』東京: 大修館書店.)

- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of cognitive grammar, vol. 1: Theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1991a. *Concept, image and symbol: The cognitive basis of grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1991b. *Foundations of cognitive grammar, vol. 2: Descriptive application*. Stanford: Stanford University Press.
- Rosch, Eleanor, and Barbara B. Lloyd. eds. 1978. *Cognition and categorization*. Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum.
- 坂原 茂. 1998. 認知的アプローチ. 『意味』(岩波講座 言語の科学 4) 第3章, 83-124. 東京: 岩波書店.
- Sweet, Henry. 1892-98. *A new English grammar: Logical and historical*, 2 vols. London: Oxford University Press.
- Taylor, John R. 1989/1995. *Linguistic categorization: Prototypes in linguistic theory*, 2d ed. Oxford: Clarendon Press. (辻幸夫 (訳). 1996. 『認知言語学のための14章』 東京: 紀伊國屋書店.)
- Tsohatzidis, Savas L., ed. 1990. *Meaning and prototypes: Studies in linguistic categorization*. New York: Routledge.
- Ungerer, Friedrich, and Hans-Jörg Schmid. 1996. *An introduction to cognitive linguistics*. London: Longman. (池上嘉彦他 (訳). 1998. 『認知言語学入門』 東京: 大修館書店.)
- 山梨正明. 1995. 『認知文法論』 東京: ひつじ書房.